

# 令和4年度 図画工作科部『その子らしく学ぶ（仮）』1年次の研究の成果と課題

杉山 祥子 渡邊 翔太

## 1. はじめに

今年度、私たちは「その子らしく学ぶ」とは、何かを考えてきた。年度当初、子どもが「いいこと思いついた、やってみよう」「こうしたらどうなるかな」「こんなものを表したい」などというおもいを抱き、「もの・こと・ひと」に働きかけたり想像力を働かせたりしながら、造形的な視点で表現する楽しさを味わっていくことが「その子らしく学ぶ」ことなのではないかと考えた。そこで、前研究主題の実践「My tree」の抽出児の姿からその子らしく学ぶ姿とはどのような姿か考え、3つの姿があるのではないかと仮定した。教科研の実践では、3つの姿が見られるかどうかを検証し、協議会の実践では3つの姿を視点として授業を構想し、その姿を支えることが「その子らしく学ぶ」につながるのかを検証していくことにした。

## 2. 研究と目的と方法

### (1) 研究の目的

①以下の3つの姿がその子らしく学ぶ姿といえるのかを検証する。

- |                      |
|----------------------|
| 1 表現にこだわる姿           |
| 2 自分なりの答えをつくりだす姿     |
| 3 自分の感覚を通して面白さを実感する姿 |

②3つの姿を視点とし、授業を構想したりその姿を支えたりすることが「その子らしく学ぶ」につながるのかを検証する。

③図画工作科部が考える「その子らしく学ぶ」とは何なのかを更新していく。

### (2) 研究の方法

#### ①段階的な分析

教科研の実践の成果と課題を受けて、協議会では「その子らしく学ぶ」をどう支えていけばよいかを考え実践を行った。

#### ②分析資料について

実践した授業について、以下の4つを分析資料とした。

- ・動画、写真記録（実際の子どもの姿、板書）
- ・子どもの振り返り（音声・写真・動画・文・絵文字）
- ・授業後の教科部での振り返り
- ・教科部でまとめた「実践のあらまし」

#### ③分析方法

分析資料をもとに教科部で子どもの学びのプロセスを丁寧に追い、目的について分析した。

分析結果を述べるにあたって、結果が何を根拠としているのかを示すため、逐語記録や授業場面の写真などを分析資料として併記した。

### 3. 研究の内容

#### (1) 実践1 3年 「まぜまぜ ヘンテコ お菓子屋さん」(立体)

##### ① 単元の概要について

子どもは、描きたいものを塗るために色があると考えていたため、色におもいが込められることに戸惑いを感じていた。

絵の具を使用した題材では、水に絵の具が溶けながらにじんでいく様子や2色が混ざりながらにじんでいく様子に「きれい!」と感動していた。スパッタリングし、にじんでいく現象に楽しさを感じたり、絵の具を油絵のように塗ったマーブル模様のような表現をきれいだと感じたりしていた。それらを目にした子どもの中には、「すごい!」と感動をあらわにして自身も挑戦しようとした子もいた。色を使った様々な表現に関わっていくことで子どもは新たな感動を得ていた。

子どもにとって色の様々な表現に触れることは、感動を生み、さらに子どもの「やってみたい!」という好奇心を生むことにつながると考えた。色と色を混ぜることで色をつくりだせることへの感動や混ざっていく過程は子どもの興味を惹き、そのような経験が積み重なっていくことで、「表現の意味や価値をつくりだす」ことにつながると考えた。そこで本題材は、色をつくりだしていくことができるようにし、幅広い色に関わることを通して、色のつくり方や色の混ざり方を楽しみ、色の重なりなどの感覚を豊かにしていき、これまで見ていた世界に様々な色が存在していることを感じて欲しいと考えた。

絵の具は、水の配分や絵の具同士の混ざり具合でも様々な色ができ、とても魅力的な材である。しかし、子どもは絵の具・水の配分・道具を扱うことに慣れておらず、考えていた色をつくりだすことに難しさを感じていた。絵の具を使用すると水の量や道具による汚れなど色に影響する要因が増え、自分がおもい描いた色をつくりだす難しさを感じていたのであろう。そこで、より簡単に色を混ぜたり、色をつくりだしたりできるようにカラー樹脂粘土を材とすることにした。本題材で意識したい「色」をつくりだす活動は、白色の樹脂粘土に絵の具を混ぜてカラー樹脂粘土をつくっていくということもできるが、樹脂粘土そのものの白色の影響を受け、全ての色が淡い色になっていく。カラー樹脂粘土であれば、混色してつくりだした色の幅も広がり、また、鮮やかな色のままマーブル模様をつくれる。この幅が子どもを夢中にさせたり、こだわりをもって色づくりを行ったりしていくことにつながっていくと考えた。カラー樹脂粘土は、手にも付きにくく、絵の具で手を汚すことなく、次の作業にもどんどん取り組める。より簡単に色が混ざっていくことは子どもにとって魅力的な材になる。これらの活動を通すことで、絵の具を使った色づくりにもつながっていくと考えた。

表1. 単元の実際

時	学習内容
①	<p>〈カラー樹脂粘土との出会い〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・軽い!・ベタベタする。</li> <li>・(色を混ぜると) ゾンビみたい!</li> <li>・途中ででもきれい!</li> <li>・赤が多い方が紫になるのかな。</li> <li>・びよーん。</li> </ul> <p>〈3色混ぜる〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・白と黄色を混ぜたらこんな色になったよ。</li> </ul> <p>〈色相環で置き場を考える〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・黄色多めとか青薄めとかでしょ?</li> <li>・白の粘土が置いてあればおけそう!</li> </ul> <p>〈授業終わり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・うまくつくれなかった色も白も使ってきた。</li> <li>・量も変えると違う色ができる。</li> </ul> <p>樹脂粘土の軽さや感触などを実感しながら、色を混ぜるとどうなるかを自分の予想と比べながら色づくりを行なった。</p>
③	<p>〈題材名との出会い〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・粘土を混ぜる!</li> <li>・ヘンテコはおかしい!</li> <li>・なんでもあり!</li> <li>・おかしい色、おかしい形をしている。</li> </ul> <p>〈ショーケースとの出会い〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お菓子が入っている棚!</li> <li>・お菓子入れたい! 入れたい!</li> </ul> <p>〈お菓子屋さんになってお菓子をつくる〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グミとかでもいいのかな?</li> <li>・お菓子っぽくない、時計型のお菓子はあり?</li> <li>・ヘンテコだからなんでもいいんじゃない?</li> <li>・茶色ってどうやってつくるのかな。</li> <li>・変な色ができたよ。これは使えないな。</li> <li>・なんか食べたことあるやつができた。</li> <li>・伸ばす道具ないかな。</li> </ul> <p>〈道具との出会い〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一回伸ばしてみよう。</li> <li>・伸ばして重ねて切るときれいな色ができた。</li> <li>・地球グミの中身を見せるように切れない。</li> <li>・伸ばし棒の上の部分を使うとロミたい。</li> </ul> <p>「ヘンテコ」や「お菓子」というキーワードを主題にしなが、それぞれが作品に表現した。粘土がうまく切れなかったり、どんな「ヘンテコ」にしようか悩んだりする子どももいた。</p>

また、粘土というものは形そのものを自由に変形でき、立体的な表現もできる材である。その中でも樹脂粘土は柔らかく、容易に変形できる。そのため、

自分がおもい描いた通りに加工しやすい。また、樹脂粘土は、細かい表現が可能ななめらかさがあり、粘土同士がよくくっつく。軽量樹脂粘土では、樹脂がのびる段階でふわふわになり、表現の幅が広がると同時に、乾燥するとスポンジのようになり作品が壊れにくい。この材の特徴は、子どもがその子らしく表現していくことを支えていくと考えた。

子どもは、ファンタジーの世界に夢をもち、そこから話を膨らめていくことが好きである。想像上であるからこそ、自由に考える機会やおもいを膨らませることにつながりその子らしさを表出しながら、取り組める題材になるのではないかと考えた。また、自分なりの空想が広がり、それが友達の空想と関わり合うことでさらに考えが膨らむという面白さもある。今回の題材を通して、色をつくり出す楽しさや色や形に自分のおもいをのせて表現する楽しさを感じとって欲しいと願い、今回の題材を構想した。

何も入っていないショーケースに出合うことで子どもは、そこにお菓子を入れたいという気持ちをもった。ショーケースの中には、おいしいものを入れたいと考えたであろう。既存のおいしいものの再現にこだわりをもってしまい、色の多彩さなどを生かすことが出来なくなってしまうように、「ヘンテコ」というワードを題材名に取り入れた。そのことにより、子どもは現実ではないファンタジーの世界をそれぞれ膨らませていった。自分の表現より、周りにどのように思われるのかを気にしてしまうA男は友だちと関わり様々な作品を目にすることで、自由に表現していいよさを感じ取りながら作品づくりに取り組んでいた。

図工において、色と形は切っても切り離すことができないものである。そこで、色と形を結びつけた題材名にした。色だけでなく「ヘンテコ」という言葉から形にもこだわりをもつ子どももいた。

きれいなショーケースにヘンテコなお菓子が入ることで、ファンタジーの世界に入り込むだけでなく、「お菓子屋さんのように展示したい。」という子どものおもいも生まれた。自分の展示用のお皿や箱を準備したり、くじやお持ち帰りスペースをつくったりするなど子どもが想像を広げながら、展示方法を考えていた。最後には、実際に先生方をお客さんとして招待して、店員になりきって案内などをして今回の題材を終えた。

時	学習内容
④ ⑤ ⑥	<p>〈困り感の共有〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶色がうまくできない。</li> <li>・混ぜりかけの色がうまくできない。</li> <li>・半分に切っても中身がうまく見えない。</li> <li>・茶色はオレンジと青を混ぜるとできるよ。</li> <li>・前、糸で粘土を切ったから糸でできるよ。</li> <li>・こうやると混ぜりかけの色ができるよ。</li> </ul> <p>〈お菓子づくりをしてみよう！〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この色なんか面白いよ。</li> <li>・切ったら中が見えるやつにしたい！</li> <li>・お菓子の本を持ってきたから参考にしよう。</li> <li>・メロンパンみたいな色になった！</li> </ul> <p>〈お客さんと呼ぶ準備はどうしようか。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お菓子について説明する紙をつくらう！</li> <li>・お菓子を食べ終わるとお皿の底にくじがあるようにしてみたよ。</li> <li>・値段をつけてみようかな。</li> </ul> <p>製作の困り感を共有し、子ども同士で解決することで主題へのヒントを得ながら活動していた。見せる相手がいることで、どのように展示するのかまで子どもが考え、作りだしていた。</p>
	<p>〈誰を呼ぼうか？〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相棒さん ・ひかりのみんな ・お家の人</li> <li>・先生たち ・全校のみんな</li> </ul> <p>〈お菓子屋さんの開店準備をしよう！〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お菓子の説明や作者の名前を書かないと！</li> <li>・お持ち帰りがあるのも面白そうだな。</li> <li>・スプーンを使って食べられるような感じで並べてみよう。</li> </ul> <p>〈開店前にみんなの作品を見てみよう。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お菓子に名前が書いてあるのが面白い。</li> <li>・色が変な感じで面白いな。</li> <li>・きれいでかわいいドーナツがすごい！</li> <li>・みんな美味しそうに見えるな。</li> </ul> <p>〈ようこそ！まぜまぜ ヘンテコ お菓子屋さんへ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんお客さんが来てくれてよかったよ。</li> <li>・校長先生にお守りのお菓子のプレゼントあげられたよ。</li> <li>・お店の人みたいに案内できてよかった。</li> </ul> <div data-bbox="963 1720 1212 1886" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1238 1688 1410 1886" data-label="Image"> </div> <p>お客さんに見てもらい、買ってもらうために意識して展示方法まで子どもが考えた。小道具なども使いながらおもいおもいの展示をしてお客を呼べ、達成感を感じていた。</p>

## ② 抽出児のプロセス

教科研では、図画工作部が考えている「その子らしく学ぶ」につながると考える3つの姿が授業の中でその子らしさが表出した姿であるといえるのかを検証した。

### ①表現にこだわる姿 第①②時のA男の姿から～紫色づくりへのこだわり～

A男は樹脂粘土に出会うと赤・青を取り、紫をつくり出そうとした。出来上がった色はおもったような紫になっていないことが発言から読み取れる。つくった色を配置しにいく友達の様子をじっくり見ながら、中央テーブルに自分がつくった色を配置しに行った。その後、再度紫色に挑戦するもののやはりおもった色になっていないのだろう。友達の様子も見ながら、なんとかできないのかと考えていたのではないだろうか。紫色から離れ、オレンジを製作した後に、友達に出来具合を確認しながら、「三色混ぜたい。」と発言していた。授業者が2色を混ぜて色をつくりだす姿を見たため、それをもとに色づくりに取り組んだが、2色の混合ではつくり上がる色の幅が狭いと感じていることが分かる。

その後白色が登場し、3色以上混ぜてもよいという条件に変わるとA男は白色を多用しながら様々な色づくりに楽しんで行った。その過程で、再度思い出したかのように紫づくりに取り組んだ。

A男は向き合っていることに対して真剣に取り組めるよさをもっている。そんなA男が紫をなんとかつくり出そうとこだわる過程には、つくり上げることが壁となる場面があった。そして、そのこだわりから離れる様子があったが、条件が変わっていく中で、再度そのこだわりに熱をおび、紫色をつくり上げた。今回のA男の姿から、こだわる姿には、A男のらしさが確かに見えたといえると考えられる。「その子らしく学ぶ」過程には「表現にこだわる姿」が確かにあるといえるだろう。



色づくりに悩むA男



紫色の作り方を話すA男

色づくりに  
こだわりの  
もつA男

A男：樹脂粘土に出会い、赤と青を取り、混ぜる。  
「青が多かった。」  
(紫をつくり出そうとしたがおもった紫にならない。)  
つくった紫を中央のテーブルに置き、席に戻る。  
「今度は赤、青、青ちょっとにしよう。」  
「なんか、できた紫になっちゃた。」  
隣のC1に話しかける。  
「赤、青は紫ができる。」

C1：「なに？」

A男：「赤、青は紫ができる。」

A男：中央のテーブルに置く。その後、再度、赤と青を取り、紫をつくり、中央テーブルの同じ所におく。  
(赤と青を混ぜるのをやめて黄色と赤を混ぜた?)

A男：周りの友達がつくっている様子や中央テーブルに置かれていく樹脂粘土を確かめている。

その後、A男は紫づくりにしない。

T：「先生、白ほしいですか、3色混ぜたいという人がいるので、白も用意しています。」

A男：「えー!?!」  
走って教卓へと向かって白色の樹脂粘土をもらってくる。  
自分の席に戻って白と黄色から混ぜる。  
「白と黄色混ぜたら、こんな色になった。」

A男：「3色混ぜていいんだよね？」

C1：「いいんじゃない？」

A男：「3色混ぜちゃおう！」

その後、オレンジや水色に挑戦しながら色づくりに夢中になっていく。

A男：紫色ができると、「先生、この色(の置き場所は) どうしましょう？」

T：「この色って！」A男と同様に紫色に困っていた、C2の所へ連れていく。

A男：「僕はね、赤を多くして、青をちょこっと、その後、白を足すんだよ！」熱心に伝えている。



## ○自分なりの答えをつくりだす 第④⑤時 A男の姿～自分なりの「ヘンテコ」～

これまでのA男は自分の作品が周りに認められるものであるのか、周りから見て正しいものであるのかなどを基準に表現方法を選択しながら作品製作に取り組む様子があった。第④⑤時では樹脂粘土を切り、中身を見せるという表現に出合い、「あっそうか！わかったぞ！」と発言しながら中身を見せるヘンテコさに魅力を感じ、それをお菓子づくりに生かそうとした。中身が見えることと自分の経験がつながり、断面に自分の名前の「い」が出てくる金太郎飴のようなお菓子をつくった。これまでは、友達が行っていることなどを参考にしていたが、断面と文字が組み合わさることが、A男のオリジナルの「ヘンテコ」につながったのだろう。完成したものを説明する際も、「超大きな飴！中に字がある所と…」と話していた。その断面はしっかりと頭文字になっている訳ではないが、「ヘンテコ」なお菓子という点で、これまで自分が取り組んだ表現が作品につながり、自分なりの「ヘンテコ」を表現できたと感じているようだった。その作品を周りに見せても周りからは「見えない！」という反応が多い。これまでのA男は周りの評価が基準となっていたので、「見えない！」という反応は、作品が否定されているように感じて、作品が作り出せた達成感がなくなってしまうのではないかと心配した。しかし、失敗だと思っている様子はなく嬉しそうに友達に見せに行っているのだ。「見えないよね。」や「頑張ったのに～」と笑顔で言っている様子から周りの評価を基準にしているのではなく、自分の中でつくり上げたということの達成感を重視していたといえる。また、断面の色の混ざり方という別視点から「スマレみたい。」と褒めてくれた友達がいたことで、自分とは異なる価値付けが加わり、さらに自分のつくった作品への価値が上がったのではないだろうか。周りの様々な表現に出合い、自分なりのものを見出すまでのプロセスのそのものが答えをつくりだすものだといえ、自分なりの答えをつくり出すプロセスにはその子らしく学ぶ姿が表れているといえるだろう。

自分なりの「ヘンテコ」を見つける

【中身を見せる表現に出合う】

A男：「そうか！わかったぞ！」  
金太郎飴のようなものをつくろうと動き出す。

【飴ができると】

A男：「切ってみます！これはなんの字でしょう？」

C1：「Hじゃん！」

A男：「『い』です！見えないよね。」  
笑顔で話している。



【他の子にも同様に见せる。】

C3：「見えない！」

A男：「頑張ったのに～。」  
笑顔で言っている。



【異なる価値付けが加わる】

C4：A男の飴を見て

「スマレみたい！」





A男：「そうかな？」（嬉しそう。）



## ○自分の感覚を通して面白さを実感する姿

A 男は第①②時で自分の感覚を通して、色づくりや樹脂粘土そのものの特徴をつかんでいった。白色の樹脂粘土に出合った際、2色の混合ではできなかった色や、他の人がつくり出していない色をつくろうとした。3色を混ぜることで出来上がる色に面白さを感じていた。混色の配分を少し変えつくり上げた色を「また、違う色ができた。」と話しながら様々な色がつくり出せる面白さを実感している様子だった。また、A 男は樹脂粘土の軽さや粘り気などを触る中で感じ取っていた。色づくりに直接的に関わらない水を入れた際も、ぬるぬるする感触などを「石鹸みたい。」と楽しんでいる様子だった。色を練る時も伸ばしながら練ると混ざりやすいことを実感していたようで、伸ばしながら練り均一に色が混ざるようにしていた。

A 男が様々な色をつくりたいというおもいをもって行動する姿や友達の影響を受けながら材の特徴と触れ合う姿には、目的に向かって真面目に向かう A 男らしさや友達の考えや行動から自分でよいと感じたものを選んで取り入れていくという新たな A 男らしさも表れていたと感じた。自分の感覚を通して面白さを実感する姿は、その子らしさが表れる姿といえるだろう。また、感覚を通して、面白さを感じた経験はその後の作品づくりに滲み出ていた。そのプロセスを経て得たものは、A 男のその子らしさにつながっていったともいえるのではないだろうか。

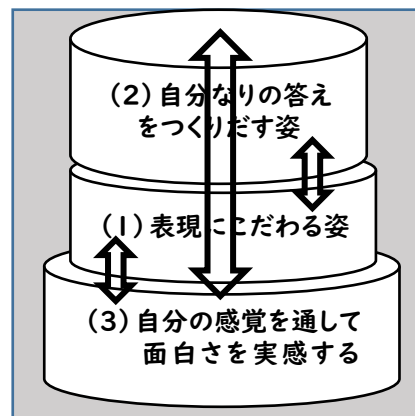
材の面白さを感じて、面白さを通して実感する姿	<p>【樹脂粘土との出会い】</p> <p>A 男：樹脂粘土を手にする。 「持っているけど軽い。」 袋から出す。</p> <p>A 男：「すごい。無茶苦茶軽い！」 「すごいベタベタする。」</p>  <p>【水と樹脂粘土を混ぜる。】</p> <p>A 男：「すごい！ なんか すごい！ なんだろう うこれ！ 石鹸みたいなんだけど。水入れるとすごい石鹸みたいなんだけど。」</p> <p>A 男：C4 に話しかける。 「水入れると石鹸みたいにヌルヌルする。」</p> <p>C4：「えー！どうやったの？」</p> <p>A 男：「白とね、青を混ぜてねそれで…」</p> 	<p>色づくりの面白さを実感する姿</p> <p>A 男：白色を受け取り、友達に3色を混ぜていいことを確認すると3色から4色と色を混ぜた。</p> <p>A 男：色を混ぜると授業者に見せにいく。 「先生、4色混ぜたらこんな色ができた。」</p>  <p>T：「ほんとだ。混ざり具合も綺麗だね。」</p> <p>A 男：「うん…」 (見てほしいのはそこじゃないんだよな。)</p> <hr/> <p>A 男：グレーができる。 「先生！グレーができたグレーが！」 嬉しそうに報告に向かっている。</p> 
------------------------	--	--

### ③教科研の実践からみえる成果と課題

教科主張で図画工作科部が考える「その子らしく学ぶ」姿を三つの具体の姿として記した。

- (1) 表現にこだわる姿
- (2) 自分なりの答えをつくりだす姿
- (3) 自分の感覚を通して面白さを実感する姿

その3点には、今回の題材で確かにその子らしさが表れていたといえた。また、その姿は点で描かれるものではなく線で描かれ、何度も行き来するため(1)～(3)の順序はつけることはできないのではないだろうか。しかし、題材初めに(3)自分の感覚を通して面白さを実感する姿が多くみられ、その後も題材を通して拠り所であることがみえてきた。また、(3)が他の2点の姿の土台になっている所から初めに(図1)その子らしく学ぶ構造のイメージ図



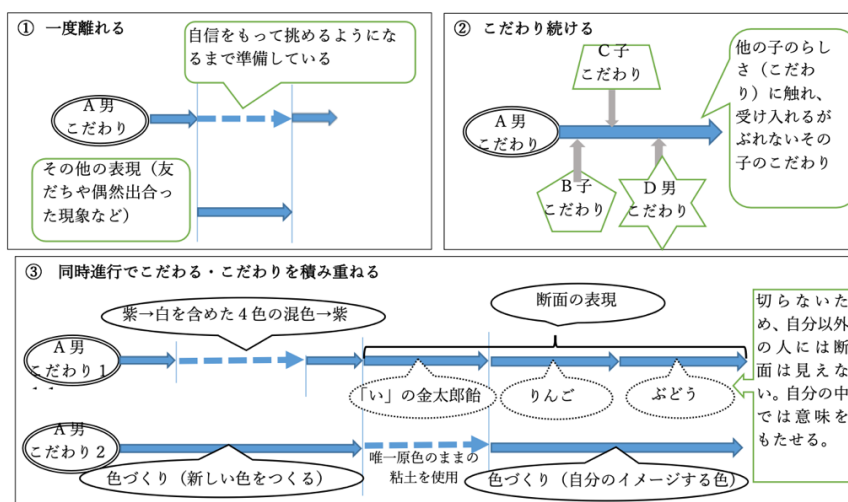
(図1) その子らしく学ぶ構造のイメージ図

記すよう更新していく。今後の実践では、今回の3つの姿を支えていくことが「その子らしく学ぶ」を支えていくことにつながるのか検証していきたい。

#### 成果

(図2) 表現にこだわる姿のプロセス

- ・表現にこだわる姿には、こだわりの目に見えて続けられるだけではなく、様々なプロセスが存在していることが分かった。(図2)



- ・新しい色をつくりだす経験を積み重ねていくことで、A男の色へのこだわりが洗練されていく様子がみられた。は

じめはつくれなかった色を自分のイメージ通りにつくりだす経験は、一度ぶつかった壁を乗り越え、もう一度チャレンジしてみようという原動力となっていた。また、子どもが「つくってみたい」と意欲的に働きかけたくなる材に出合うことは、新たな表現を発見したり、表現の幅を広げたりしていく効果ももたらしていた。このように、その子らしさを捉えて材を選ぶことで、自分なりの答えを更新していくことができたと考えられる。

#### 課題

- ・子どもによっては「お菓子屋さん」という言葉にのみこだわっていたり、一部の男の子はお菓子のイメージとヘンテコがうまく合致せず悩む姿がみられたりした。これらの姿は、お菓子屋さんという言葉が表現の幅を狭めていたとも考えられる。そのため、今後題材名や全体の大きなテーマ設定をする際、広すぎず狭すぎないものを子どもの姿から考え続けていく必要がある。
- ・本実践ではGoogle クラウドの課題提出を活用し、子どもが自分で写真を撮りコメントを送る方法をとっていた。A男が自分の作品を種類別に角度を考えて撮る姿などからその子の表現へのこだわりは写真からも読み取ることができると考える。そのため、写真については製作途中も含め残していくことが「その子らしく学ぶ」ことを支えていくために有効である。しかし、コメントに関しては音声記録をするなどもっとその子のその時の思い出を残していける振り返りにしていきたいと感じた。そのため、今後教科部で検討をしていく。



## (2) 実践2 2年「どんどん かわる ふしぎな形」(サンドアートによる絵)

### ①単元の概要




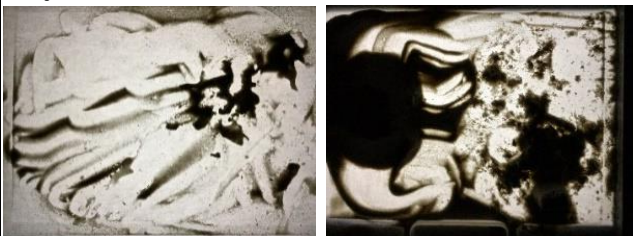
本題材では、クリアケースの上に砂を撒き、暗闇の中で下から光を当て、砂の厚みで絵を描く造形活動を行った。通常は上から光を浴びた砂に絵を描くので、砂の溝を線にしたり砂の山をつくったりすることはできるが、一色の砂では鮮やかな色彩を表現することはできない。しかし、下から光を当てることで線が白く浮き上がって見え、これまでの砂からは想像できない明暗や濃淡に出合い感動し、新たな表現の可能性を探ってみたく動き出していった。

本題材で扱うサンドアートパフォーマンスは、一つの絵を描いて終わりではなく、その絵が刻々と変化し、次の絵につながることで一つの物語を紡いでいくものである。今回は細部までつくり込むための道具は使用せず、自分の手で描いていく。手で描くことは、筆や鉛筆を媒介として描くのとは違い、自分の力加減や指・つめを当てる方向などすべてが影響していく。そのため、子どもは自分の感覚が表現と直結していることが分かりやすく、自らの手の動きを表現に生かしていった。砂に描かれた絵や模様は、つくっては消していくため同じものは二度とつくることはできないがその違いさえも楽しんでいった。

偶然できた表現を「なんかきれい。」「なんかかっこいい。」と感じる経験を重ねることで、抽象的な表現に自分のおもいや意味を込め、強さや優しさ、目に見えない音や風などを砂の動きで表現していった。このような材との対話を通して、自分の主題を探っていくことができることもサンドアートパフォーマンスの魅力である。

これまでの題材の中で「光を当てるとどうなるか。」や「裏から見るとどうなるか。」などの視点を変えた見方をする子どもが増え、偶然性や変化に興味をもつ子どもの姿も見られてきていた。そのような子どもが、光・

表2. 単元の実践

時	学習内容
①	<p>〈砂との出会い〉 (一人一台) どんな砂かをたくさん試して確かめた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海の砂のようでサラサラしているよ</li> <li>・キラキラしたパウダーみたいでつめたい</li> <li>・砂の噴水ができた</li> <li>・指で絵や模様を描くことができるよ</li> <li>・カップに入れても固まらない</li> <li>・濡らすとザラザラになってすこし粘土みたい</li> <li>・水の中に沈んだ砂はサラサラのままだ</li> <li>・揺らすと砂がダンスするみたいに見える</li> </ul> 
②	<p>〈絵を鑑賞し、光と砂で美しい模様を探そう〉</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・(拡大した) 砂?</li> <li>・キラキラしている</li> <li>・人みたい</li> <li>・色々な形</li> <li>・ほたるみたい</li> <li>・アート</li> <li>・カフェラテ</li> <li>・エックス線写真</li> </ul> <p>台を叩く、指で落とす、高い位置から落とす、肘で描く、カップで跡をつける、数本の指で同時に線を描くなど可能な表現をみつけていった。</p> 
③	<p>〈リレー形式で模様をつないでみよう〉 (これ以降、班で一台 動画撮影)</p> <p>表現をつなげていくこと、重ねていくことのよさや砂の量で表現が変わることを見つけていった。</p> 



偶然性・変化という要素が合わさったサンドアートパフォーマンスという芸術分野に出会うことで、砂と光の幻想的な世界に引き込まれ、砂に触れる中でどんな表現ができるのかと興味を抱くところから始まった。自分の手で描くことで砂は簡単に形を変えられるが、逆に単独では形を留めることが難しいなどの材の面白さや特徴をつかんだ。模様や形が刻々と変化していくことに気が付き、試行錯誤していく中で偶然生まれた模様に想像が広がっていった。子どもが自分の想像を広げる姿はいきいきとしているがそれぞれの想像の世界を共有することは難しい。そこで本題材では、自分が納得した表現を残せるように、動画で撮影し、一つの映像として作品を製作していった。この方法を用いることで、自然と互いに表現を見合ったりつながりを意識したりすることができる。自分の手で自分のおもいを表現しながら、友達のおもいや表現が重なったり加わったりすることで、自分のおもいだけでは表現できないものを生み出すことができた。また、砂に描く絵や模様はつくっては消えていくため、偶然できた表現を再現するには技法や構図にこだわりが表れた。

自らの作品にどの方向から光を当てるのか考えたり、それぞれの表現や意味がつながり新たな意味が生まれるよさを感じたりすることで、その子なりの表現の価値をつくりだす姿が見られるようになっていった。このような造形的視点をもった子どもが色彩の表現が制限される中でも暗闇の中での光の効果を生かす表現を楽しんだり、重なりによる厚みの変化を大切にしたりしていくことを願い、本題材を構想した。

時	学習内容
④	<p>〈題材名と出会い、どんな主題ができるか試そう〉 (動画撮影)</p> <p>題材名 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">どんどん かわる ふしぎな形</span></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どんどんが叩く音みたい</li> <li>・つなげてどんどん変わっていくんだ</li> <li>・ふしぎというのは言葉では言い表せない形かな</li> <li>・台を叩いていくと徐々に砂が中央に集まり山が出来あがっていき噴火するように見えた。この動く砂の様子を見ていたらマグマに見えてきた</li> <li>・砂の濃淡が何かに見えたり、見る向きが変わると違う物に見えたりするな</li> </ul>
⑤	<p>〈主題をどう表現するか考えよう〉</p>
⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に描きながら〇〇みたいを探していこう</li> <li>・偶然できたけど月みたいで綺麗だね</li> <li>・花火が打ちあがる感覚で撮ってみようよ</li> <li>・振動で段々山が大きくなっていき、最後に噴火するすごいのが撮れたよ</li> <li>・はじめに絵を描いておいた状態から動画をスタートしてみてもいいね</li> </ul>
⑦	<p>〈鑑賞して気づいたことをまとめてみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなの作品(動画)を見てみたい!</li> <li>・カメラに頭が入らないようにした方がよい</li> <li>・やり方が色々あった・湿気のような模様が綺麗</li> <li>・マグマも面白い・パンをこねている感じは、物語のイメージが湧いてよい</li> <li>・物語を語っているチームが思ったより少ない</li> </ul>
⑧	<p>〈気がついたことを生かして表現してみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・始まりと終わりに特徴をつけて自分たちの班だと伝えたい</li> <li>・全員の手を入れたいな。班のみんなのピースを合わせて星をつくってから始めるよ</li> <li>・桶を使ってできた月のような模様が綺麗だから最初に使おうよ</li> <li>・物語を考えると指1本だけになってしまう</li> <li>・上から砂をかけたり、叩いたり、カップを使って描くことができなくなっちゃうともったいない</li> </ul>
⑨	<p>〈絵コンテをつくってみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで撮った動画の中からいいなと思うものを繋げてみよう</li> <li>・新しい物語を思いついたよ でも、みんなでやった表現の方がよいかな</li> </ul>
⑩	<p>〈ライブで鑑賞会〉</p>
⑪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間は5分までには収めよう</li> <li>・ライブは緊張するけど、始まりと最後以外はその場でつなげてみよう!</li> <li>・語りを入れたいからみんな声を出さないでね</li> </ul>

## ②抽出児のプロセス

3つの姿を視点とし、授業を構想したりその姿を支えたりすることが「その子らしく学ぶ」につながるのかを検証した。

### ○「その子らしく学ぶ」～自分の感覚を通して面白さを実感する姿から～

第①時では、普段身近に存在しているものとは違う砂と出会い、特徴や魅力を体感しながら「どんな砂なのか」を子どもは確かめていく時間とした。B子は目で見て砂がきらきら光っていることに気が付き、初めは人差し指1本で触れ、指でつまみ粒の感触を確かめてから海岸の砂に似ているがそれよりもトロンと落ちることに引っ掛かりを覚えていた。その後も砂に円を描いたり指についた砂をパラパラと落としたりしながら感触を確かめ続けているが周りの友達が発する言葉や動きに影響を受け、音について調べ始める。砂を落とす量や角度を調節しながら「音はしないか。」と予想しながらも「少しすわ～っていうよ。」とB子の感覚を言葉で表現していた。台の上でカップを逆さまにして砂の上をポンポンと叩いた時の音、カップで円を描きながら擦りつけた時のゴリゴリという音など、こうしたらどんな音がするのかと音の出方を調べていた。音と同時にカップの中に砂を閉じ込めた時の見え方に注目し、砂の山にカップを押し当てると中の砂が盛り上がる様子を見て、「ねえ、これさ、なんか、なんかすごいことになった！展望だ！（展望台）」と友達に大きな声で伝える。その後、B子が展望台に見えたカップの中の山を砂で埋めていくことでカップの中の明暗が変化することを確かめた。触り心地から音へ、音から明暗へと次々に視点を変えたり戻ったりしながら材である砂を分析していくB子の姿が見られた。同じ班の子がカップの中の砂をパフェに見立てて砂の落ちる様子を観察していると、「わあ、カフェみたい。私もカフェつくる。」と言いながら砂のサラサラとした感触をもう一度強く感じ、「これって海岸の砂かな。もしかしたら…」「冷たいし、サラサラしているし、キラキラしているから…」と自分が海岸で触った時の事を思い出しながら語る。その後も何度も落ちる感じやキラキラしていることに関して発言し、自分の中では海岸の砂ではないかという仮説が確信に変わりつつある。そのタイミングで教師の所に来て「先生、これ海の砂だと思います。」「あの、これ冷たいし。」「海の砂ってこんな感じでサラサラして冷たいんですよ。流木などがあるからちくちくします。」「先生、パール風呂って入ったことある？真珠を粉にしてそしたら体がキラキラになるんですよ。」など自らの体験を交えて根拠を

感  
触



音



見  
え  
方  
(  
明  
暗  
)



濡れた時の感触・音・見え方

B子：「…は少しドロツとするだけだから。」(予想)

「ねえ、これ何か一瞬で固まったよ！」

T男：「入れすぎると固まり過ぎるから…」

B子：「もっと水入れたらどうなるんだ。」

「固まり過ぎていて砂も見えない。」

T男：「ジャリジャリ、なんか固まっている。ちょっと。」

B子：教師に「糠漬けの糠床みたいになりました。」「こないだクレヨンしんちゃんやってた。」「結構固まってきれい！」

語った。周りの友達が試していることを直接見に行き得てきたり、無意識的に聞こえてくる言葉や動きがB子の中に残っていて自分の興味と一致した時に自分の引き出しから出てきたりする様子も見られた。第①時の後半では、「水で濡らしたらどうなるのか」をやってみたいという友達の言葉を聞き、近くの友達が霧吹きで砂を濡らす様子を見て、自分もやってみたくてすぐに動き出す。「砂が濡れたらどんな感触になるか、どんな見た目になるか」を自分の体験から予想していたが、実際に水に濡れた今回の材である砂はB子の予想とは違う感触になったのだろう。その後、T男とB子は今まで経験したことのない感触を「砂が活性化する」という言葉を用いて表現し、丁度よい具合に濡れた砂の状態をつくろうと二人で追究していく。そして、活性化した砂と濡らしていない状態の砂を組み合わせる泥団子づくりに繋げていく。幼稚園でつくった時に使った砂の種類を思い出し、友達と確認し合い楽しんだ。B子は「子どものロマン」という言葉を使い、この時の自分のおもいを表現した。その後、砂と光で表現していく時にも「水は固まらせるためだから今は使わない。」という発言や砂が自分と意図しない方向に動くことで表現が変化することを理解して表現方法を考えている姿から第①時の砂の感覚や特徴が生きていることが分かる。このように自分の経験の中から似た感覚を探し出したり新たな感覚を自分たちなりの言葉で表現したりすることで材の特徴やその生かし方・面白さを体感し、B子が自分のものにしていったといえる。



T男：「これで砂を入れたら絶対活性化して水が固まる。」

B子：「うん。すごい…もうちょっとシュッシュした…」

T男：さらさらの砂を入れる。

B子：「そうだよ。砂としたら活性化する。」

「ああ～全然活性化しない！」

「ああ～やっと活性化した！これはいい。」

「これは活性化し過ぎてる。」

「出しにくい。これ全部いれちゃおうか？」



T男と砂と水の調節を続ける。

## ○「その子らしく学ぶ」～表現にこだわる姿から～

第②時では、子どもが第①時の最後に意図せず残した砂に光を当て、浮かび上がった美しい模様を写真にして提示した。B子は「なんだろう？」と呟いた後、「カフェラテか？（喫茶店に行った経験）」「分かった！これエックス線で見た砂だ！（iPadのカメラ機能を使用した経験）」と予想を立てていった。友達の発言などから今回行くことを理解し、早く試したいと走って自分のボックスまで移動した。鑑賞した絵のイメージからどうしたら白い部分が出るのか理解しているため初めから砂の量を調節する。しばらく模様を描く際は必ず中央に砂を集め、描く場をつくっていた。自分の手の跡などからインスピレーションを得たのかお化けを描こうとするが砂が崩れてうまく線が出ない。次に色々な線を描き、「う～ん！面白い！」と描いた線の見え方を楽しむ。その線から「あみじゃが（お菓子）つくろうかな？」と考え、縦線を描く。その後、横線を描くが縦線が消えてしまう。これを2度繰り返すがうまく線が出ず、網模様にならない。次に右手で3本の縦線を引き、右手を残したまま、急いで左手で3本の横線を引く。B子は砂の特性を感じながらも思い描いた線を描くことにこだわっていた。何度も挑戦していくうちに縦線からやると横線が消えてしまうと考え、横線を長くしてから縦線を引いてみるとうまく線が残ることに気が付く。線を描く時には、先に描いた線は後から描いた線の影響を受けることを理解して自分の納得できる線が引けたところで教師に「先生！ちょっと来て！あみじゃがが完成した。」と伝えた。それで



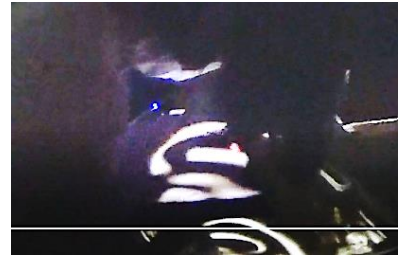
も、完全ではないようで線を描く様子を教師に見せながら「こうなっちゃうんだよ。」と言い、その後も4回繰り返して描く。その重ねた線をぐるぐると回すように消した際にできる模様を面白いと感じたようで「私、台風の模様をつくってみる。」と呟く。この台風に関しても何度も指で素早く線を描き、自分が指を動かすことで砂が動き、自分の意図とは違う変化が生まれ、線が埋もれては再び現れる様子をきれいだと感じていた。そのため、ここでは使用することを伝えていない動画撮影をし、自分で動画を見直していた。これ以降も自分が発見した表現を生かし、最後にこれだと思った2枚の模様（海の野原やおばけの世界）を写真として収めた。どちらの写真も偶然できた表現やこれまで発見した表現が自分の世界観とつながり、B子がこだわりながら探し辿り着いた美しい模様である。

第③時では、班の友達と表現を重ねたりつないだりするリレー方式に出合い、素早く、途切れることなく表現をつないでいくことにこだわった。一秒で手を捻りながら描く表現に「個性的」な魅力を感じ、多用する。これは、B子が自分の意図しない砂の動きから生まれる表現によさを感じ、この一瞬でしかできない表現に価値を感じていたと考える。このこだわりは第④時にも続き、自分のこだわりと友達の試してみたい表現の違いを感じつつも表現を絶やしてはいけないというこだわりから只々ひたすら互いに納得のいかない表現を続け、壁を感じる。第⑤時に他のグループの表現や発言に触れる時間をつくった。そこで、B子自身がこだわっていた素早さや途切れないことよりも大切なものがあると気が付く。そして、自分がよりよい表現をするために必要な「捻り」と「個性的」へのこだわりは残すが「スピード」や「途切れずに続ける」というこだわりは優先順位を下げるという柔軟さを見せた。最後のライブでは、「捻り」「上から砂をかける」「振動を使う」「カップの跡を利用する」などこれまでの造形活動の中でよいと感じた表現をすべて取り入れて表現しきった。自分が意図した表現と自分の意図とは関係ない砂の動きが合わさった時の美しさには題材を通してこだわり続け、段々おもしろい入れが強くなっていった。それと同時に偶然生まれた表現に「〇〇みたい」を探しながら物語をみんなと共にゆっくり表現するよさも感じていくことができた。他者との関わりの中で友達らしさに気付き、ぶつかったり話し合ったりすることで互いを認め合う経験はB子らしさを深めていったといえるだろう。

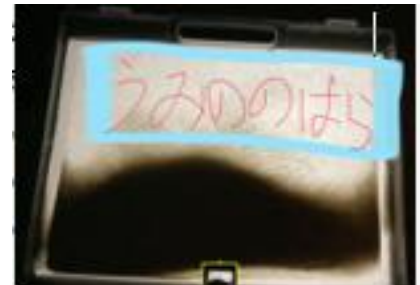
あみじゃが



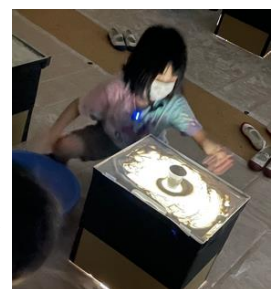
動画を撮りながら素早く線を描く



海の野原やおばけの世界



カップの上から砂を落としてできたドーナッツ



一秒で手を捻りながら描く

B子：「私、個性的になってる？」  
「速いと個性的なのつくれる。」



## ○「その子らしく学ぶ」～自分なりの答えをつくりだす姿から～

第④時で題材名「どんどん かわる ふしぎな形」と出合った後、前時に行ったリレーで互いに表現をつなげていくがやりたいことが食い違い、納得のいかないまま表現を続けた。そんな中でも表現を絶やしてはいけないという自分の中のルールにこだわる B 子の姿があった。しかし、リレーにしようとすることで表現について話し合うことができなくなっていることや B 子自身が表現時間に縛られてしまっていることを第⑤時で見つめ直し、もう一度友達と共に表現を楽しんでいく。そのきっかけとなったのは「第④時にどのような『どんどん かわる ふしぎな形』を見つけたか」や「困ったこと」を共有した時間である。この時に他の班が考えた主題「マグマ」という作品に出合う。作品はボックスを叩いていくことで砂が徐々に中央に集まり山が大きくなっていく。最後に砂を噴火させるように動かすことで一つの作品が出来上がったという話を聴く。他の班は〇〇みたいなものがたくさん出来上がり、人によって見え方も変わることが語られた。また、「言葉では表せない形」という言葉もキーワードとなり、第⑤⑥時の B 子の表現に影響を与えていた。第⑤⑥時では、自分たちの表現を楽しむ中で、何かに見えた表現について語り始める。何かに見立てることを繰り返すうちにお話を紡ぎながら描き始める。はじめは班の M 子が語ることが多かったが、途中から B 子が中心になってお話を語り始め、「私、想像するの大得意なんです！」と興奮しながら教師に話にきた。第⑦時、何回かお話をつくりながら表現し、初めと終わりに特徴をつけるべきだということに気付いた B 子の発言からどの班もはじめと終わりを考えるために絵コンテを描いた。その際、B 子の班は形が変わっていく案とお話の案が出ていた。しかし、第⑩⑪時のライブでは、お話ではなくその場で偶然描かれる形を生かしながら抽象的な美しさや面白さで友達を魅了していく。B 子の振り返りに「ライブって、聞いて『ライブ！？』と思いました。理由は、絵コンテの時、線の絵コンテを書いてしまったからです。なぜいけないかというと、テーマが『どんどん かわる ふしぎな形』だからです。」と書かれていたことから B 子が「ふしぎな形」というものを単純に線で描く絵ではないと捉えていることが分かる。ここまでの B 子の姿から自分の感覚を通して楽しんでいく中でこだわりが生まれ、試したりこだわったりを繰り返し、悩みや迷い・疑問が生まれ、それに対して自分で選択決定を繰り返していることが分かった。

### 第④時

B 子：「リレー式でやる？」

T 男：「普通につくる？それとも…」

M 子：「この前の順番にしましよ。」

T 男：「リレーにするかだよ。まずは。」

B 子：「リレー式にする？」

Y 男：「砂を増やし過ぎたらただの暗いものになっちゃうよ。」

T 男：「順番はなしで。」

B 子：「順番なしでやったらぐちゃぐちゃになっちゃうって…」

M 子：「じゃあ、みんな。」

### 第⑤⑥時

B 子：「リレーじゃなくてやってみる？」

M 子：「今日始めに言ってた『何かと何かを合わせてそれがどういうものなのか』ていうのがどんどん変わる。」

T 男：「リレーじゃなかったら相談できる。」

B 子：「スローでやるか。相談するならタイムラプスにする？」  
(長い動画でも大丈夫。)

Y 男：「順番どうする？」

T 男：「順番だとリレーになるよ。」

M 子：「何かと何かを合わせた所から始めよう。」

B 子：「〇（聞き取れない）と三角」  
(表現と表現の間の時間で目の前の表現を味わい、〇〇みた



いと立ち止まるよさを感じている。)

### ③授業実践からみえる成果と課題

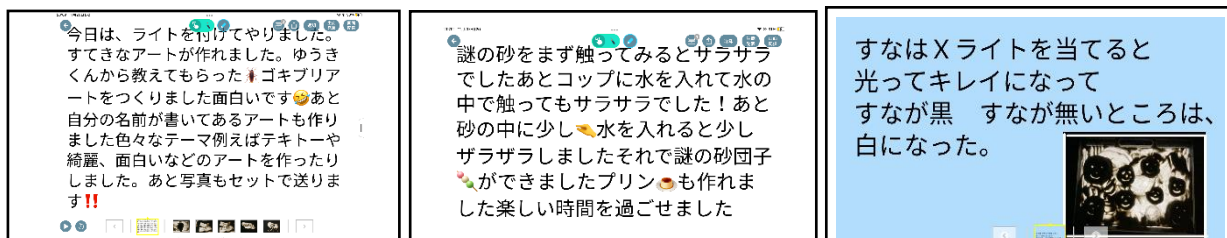
成果

・図画工作科部における学び「表現の意味や価値をつくりだすこと」の具体的な姿

本題材において、子どもたちは「自分のおもいを表したい」「何かを伝えたい」という意図をもち、動き出した。共同製作にすることにより、対話や鑑賞によって他者の表現にふれ、自己のおもいを見つめ直した。そのおもいを表現するための方法や順序を選択していきながら、自ら意思決定していく姿も見られた。また、自己と他者の感性が響き合うことによって、表現の意味や価値をつくりだしていく発言が見られた。

- ・ 振り返りにおける ICT の活用

教科研で課題として挙げていた写真や音声記録などを振り返りに活用することを検討し、本実践では iPad を活用して動画、写真、音声、手書き、文字を打つなど様々な方法で振り返ることができるようにした。毎時間振り返る中で言葉だけでなく絵文字やどんな写真を載せるかで子どものおもしろが伝わってくるが多々あった。そのため、振り返りにおいて ICT を活用することでその子らしさを捉えたり支えたりすることに役立つと考えている。



- ・その子らしく学ぶプロセスが明確になってきたこと

図画工作科部が考える「その子らしく学ぶ」姿とは、子どもが「いいこと思いついた、やってみよう」「こうしたらどうなるかな」「こんなものを表したい」などというおもいを抱き、「もの・こと・ひと」に働きかけたり想像力を働かせたりしながら、造形的な視点で表現する楽しさを味わっていくことであると考えている。

そして、本実践からその子らしく学ぶプロセスには3点の視点に置いた姿は題材を通して見えるタイミングは違うが必ず見えてきた。しかし、視点の1つである「自分なりの答えをつくりだす姿」については、学ぶプロセスの中で「悩んだり立ち止まったりしながら自分で選択決定していく姿」であると置き換えた方がより姿が明確になると考えた。

## 課題

## その子らしく学ぶプロセスの3つの視点の関連性について

成果にもあるように、「その子らしく学ぶ」授業を構想すると学びのプロセスの中に 3 点の視点に置いた姿が表出することが分かったが、相互の関連性や順序性はまだ見切れていない所がある。今後、実践を重ねる中で視点を細分化したり関連性を見出したりしていきたい。



#### 4. おわりに

教科研や大研Ⅱの実践で「その子らしく学ぶ」3つの姿が見られることが明らかになり、その後の研究から協議会の実践では3つの姿を視点として授業を構想していった。その姿を支えることが「その子らしく学ぶ」につながり、その子らしさに還るものがあるだろう。それを明確に区分することはできないが、大きく2種類に分けられるのではないかと考えた。協議会での実践の姿を通して分類すると以下ようになる。

##### <教科としての学び>

- ・ 材(砂)の特性
- ・ 材(光)の効果
- ・ 作品の魅せ方
- ・ 多様な表現を自分たちでみつけたしていく
- ・ 砂、光、影などの感覚が磨かれた
- ・ 生活の中にも表現の場を見出せる



##### <人間性にまで影響を与える学び>

- ・ 他者との関わり  
(友達らしさに気づき、ぶつかったり話し合ったりすることで互いを認め合った。)
- ・ どのグループの表現のよさも認めたりよい影響を受けたりしていたが自分たちらしさを大切にした

その子らしく学ぶと教科としての学びのみに留まらず、教科としての学びがその子らしさにまで影響を及ぼす学びになっていくのではないだろうか。そして、その子らしく学んで得た教科としての学びは題材ごとに得られるが、その子の経験として「その子らしさ」の中に加わっていく。それを繰り返すことでその子らしさを深めたり広げたりしていくことにつながっていく。これらのことから、「その子らしく学ぶ」とは、

その子らしさを表出しながら「もの・こと・ひと」に感覚を通して関わり合ったり、こだわって関わり合ったり、選択決定しながら関わり合ったりして、学びを繰り返して進んでいくこと

といえるのではないだろうか。

今後も3つの視点に置いた姿を通るような題材構想をすることや子どもの表れに合わせてかわりを変えていき、実践を積み重ねていく。